

ジブリパークを歩いて Vol.14



菅原小春（ダンサー）

1992年、千葉県出身。幼少期に創作ダンスを始め、小中高生の時に数々の有名ダンスコンテストで優勝。2010年に渡米し、独自のダンススタイルが高く評価され、国内外で活躍するダンサーとして注目を集める。NHK大河ドラマ『いだてん』（19年）に出演し、女優としても活動の幅を広げている。舞台「千と千尋の神隠し」（22年）ではカオナン役を務めた。

「現実ってこんなに素敵」って ゆっくり歩いて感じてほしい

ジブリ作品も子どもの頃から見て育ちました。学校ではテレビの話題についていけず、家に帰ってお姉ちゃんとジブリのビデオを見まくっていましたね。もう私のDNAに入っています！ジブリ作品って、良い作品を残しているというだけでなく、「愛」を感じるんです。どの作品も「愛し合っているって」って



思わず踊りたくなるどんどこ森

ダンサーになったきっかけは小さい頃から音楽に囲まれて育ったこと。両親がテレビをつけなかったのも、家ではいつも音楽が流れていました。お姉ちゃんは歌を歌い、私は踊る。それが日常でした。そんな私を見て両親が近所のお遊戯スクールに入れてくれました。小学生になってからは自分で振り付けを作って、クラスの子に声をかけ、近所のイベントに出演していました。創作が好きで、自作自演するのが楽しくて、今はその延長線上にこのような感じですね。

どの作品からも感じる
「愛し合っているって」

世界で活躍するダンサーの菅原小春さんが「どんどこ森」や「もののけの里」を巡りました。幼い頃からスタジオジブリ作品の大ファンで、表現者の視点を交え、ジブリパークの魅力を熟く語りました。

ハウルの城で踊り
表現の幅が広がる

言ってくれている感じがしていて、ダンサーとしても、いつもそういうところを目標のように感じています。

2024年放送の音楽番組で「ハウルの城（魔女の谷）で人生のメリーゴーランド」に合わせてパフォーマンスをしました。視察から収録まで2週間くらいの準備期間でした。『ハウルの動く城』の宮崎駿監督や久石譲さんの音楽、そしてジブリパークの宮崎吾朗監督が生み出した世界の中で踊るなんて、思考回路が追いつかなかった。正直まだ自分が未熟すぎて、「あと10年ください」という気持ちでした。でも、「ハウルの城」という建物を主役に見立てて踊るというのは初めての経験で、表現の幅が広がる機会になりました。舞台「千と千尋の神隠し」でカオナンを演じた時は言葉だと「あ」しか言えないから、動きでどう表現するかいろいろ試行錯誤しました。ダンサーがただお面をつけて踊っているようにならないよう、カオナシの孤独な気持ちになりきってそこからこぼれてしまう思いを体で表現することに徹しました。

創作で困ったら、宮崎駿監督や高畑監督のドキュメンタリーを見ます。創作している時って孤独で、宮崎監督が「やめる、やめる」って言っているのを見ると、おこがましいですが、「それでいいんだな」と思えるんです。孤独な作業の中でもチームでつづっていて、実はみんながいる

んだという温かさに気づき、勇気をもれます。

「歩くの最高！」
そう思わせる空間

ジブリパークを巡って感じたのは、とことん愛情がある人たちが作った場所だなということ。特に感動したのが「どんどこ堂（どんどこ森）へ向かう道。みんなが息を切らしながら登っていて、テーマパークというより山にきたような感覚でした。素敵な景色を見たいなら、山あり谷あり、砂利もあるし段差もある。それと一緒に楽しく体験しようという優しさ、いい意味での厳しさが寄り添っている感じがしました。



山道を登って出会った「どんどこ堂」

子どもの頃も大人になってからも、ジブリ作品から感じるのには自然と共存する素晴らしさ。人間はゴミもいっぱい出しちゃうけど、ちょうどいいところで自然と仲良くできるんじゃないか。それを見つけようよと、何回見ても教えてくれます。ジブリパークはそれをまさに体感できる場所。「現実ってこんなに素敵だよ」。



楽しく「タタリ神」と一緒にポーズをとる小春さん

まだ来たことのない方は絶対来て！そして、感じてほしい。ここに来ると、「歩くの最高！」って思わせてくれます。ゆっくりでもいいから、前に進む。そんな素晴らしさを教えてくれます。家に帰っても、そういう気持ちが続いていたらいいなと思っています。

前回は
角野隼斗さん。
その記事は
ウェブサイト
で公開中



チケットは予約中
© Studio Ghibli